カメたちの「ちょっと」日本昔話

ナレーション	ここは、大濠公園近くの小さな池、この池には昔から「ニホンイシガメ」というカメたちが、のんびりと幸せに暮らしていました。 親子ニホンイシガメがのんびりとえさを食べている。
石　カメ子	おかあさん、今日もここにはおいしい水草がたくさんはえてて嬉しいね！！
石　ハハガメ	そうね、この池はお母さんの産まれる、ずっとずっと前から餌がたくさんあってしかも平和でいい所なのよ
カメ子	（ふと思い出すように）でもね、おかあさん、私最近この池の近くで見たこともないカメをよく見かけるのよ
ハハガメ	あら、どんなカメ？
カメ子	なんだか体が私たちよりもずっと大きくて、顔にお化粧したみたいに赤い模様がついているカメなの、しかも一匹だけじゃないみたい・・。 アカミミマミー登場（一心不乱に食っている）
カメ子	あ！あのカメだよ！！
ハハガメ	あのう・・・もしもし？（遠慮がちに声をかける）
マミー	・・はっ！あ、あらあっこんにちは！（我に返るように）
ハハガメ	え・・ええこんにちは、あの、失礼ですが最近こちらに引っ越していらっしゃったんですか？
マミー	ええ、引っ越したというか（言いにくそうに）実は私、置き去りにされたんです。
ハハガメ	それはどういうことですか？

マミー	私はミシシッピアカミミガメといいます。元々は外国で暮らしていた種類のカメです。
ハハガメ	あらあら、はるばる外国からいらっしゃったカメさんなのね
マミー	ええ・・。私たちの仲間はペットとして日本へやって来ました。私自身も子供のころお祭りの夜店で買われ人間の子どもに育てられました。最初、それは「かわいい、かわいい」ともてはやされて、楽しく過ごしておりました。しかし私がどんどんと成長して行くにつれ、人間達の態度が変わってきたのです。私の暮らす部屋は成長に合わせて狭くなっていき、人間の子どもは、私のことを「大きくなってしまったらかわいくない」と・・・。 そして、ある日見たこともない場所につれて行かれたと思ったら・・そのまま。
ハハガメ	ひどい話ですね！！なんて勝手な人間なんでしょう！
マミー	しかも、私と同じ仲間が、同じような理由で人間達に捨てられて、ほらこんなに何匹もこの池にたどりついているようなんです。 ニホンイシガメさん、どうか私たちをここで一緒に住まわせていただけませんか？
ハハガメ	わかりました！そういうことなら、ここでみんな仲良く暮らしていきましょう！
ナレーション	こうして、ニホンイシガメたちとアカミミガメたちの生活が始まりました。 しかし、3 年 4 年と月日が流れるうち、ニホンイシガメ達は不思議なことに気がついたのです。
カメ子	ねえおかあさん、最近、餌が少ないね・・・・。
ハハガメ	そうね、しかも最近やたらとアカミミガメさんの仲間が増えたみたいよ。 ほら、あそこにもここにもどこもかしこもアカミミガメさんだらけじゃない。
カメ子	それにね、私が昨日、日光浴をしようと公園に行ったら、アカミミガメさんたちがたくさん先に園に来ててね、ここは満員だからニホンイシガメはいれられないって私は追い出されちゃったの・・。
ハハガメ	なんてこと、私たちカメは体を消毒したり、暖めたりするために、毎日きちんと日光浴をしないといけないのに、その場所まで奪われるなんて！きっとエサだって私たちの分までアカミミガメさんたちが食べてしまっているんだわ！もう我慢できない！ 仲良く暮らすっていう約束だったのに、このままじゃ私たちはここで暮らすことが出来なくなるわ！どういうことなのか聞きに行きましょう！！

カメ子	うん！！
ナレーション	あら、あら、なんだか大変なことになりましたね。 それでは、お話の途中ではありますが、ここで皆さん一緒に考えてみましょう。 Q1．なぜ外国で生活しているはずのアカミミガメさんが日本で生活しているのですか？ A.　人間〜〜〜（会場の意見） Q2．それではアカミミガメさんがふえるとなぜニホンイシガメさんは困るのですか？ A.　餌がない〜〜（会場の意見） Q3．なぜ同じカメなのにアカミミガメさんの家族はどんどんふえるのでしょうか？ A.　殺される〜〜いじめられる〜〜〜　etc・・・（会場の意見） その答えは、この後のお話の中にでてきますよ。それでは皆さん続きをご覧下さい。 ニホンイシガメの親子は、アカミミガメを訪ねました。数年前、わずかな仲間たちと細々と暮らしていたあのアカミミガメは、今や何匹もの子どもをもつお母さんとなっていました。
ハハガメ	アカミミガメさん！最近あなた達の仲間が増えてきて、餌が不足してきています。 しかも日光浴用の公園に、私たちニホンイシガメは入れてくれないってどういうことなんですか、あそこはみんなの公園だったはずでしょう！
カメ子	そ〜だそ〜だ！！ひどいぞ〜！
ミミ子	ママ〜この人達、ダレ？
マミー	ニホンイシガメさん達の家族よ。私たちの前に、この池で暮らしてらっしゃったの
ハハガメ	前にってどう言うことですか！私たちは今も昔もこの池で暮らしていますよ！！ あなた達一体何なんですか？たった数年でこんなに数が増えるなんて普通のことじゃないですよ！
マミー	いいえ、私たちにとっては普通の事よ。だって私たちは一回に 20 個は卵を産むのよ。大体 1 年間で 70 匹近いかわいいベビーが産まれるの。そして私が産んだこの子ももうすぐ卵を生むことが出来るようになるわ。

ハハガメ	に、20 個！？　70 匹！？　私たちニホンイシガメは１回で6（～10）個ほどしか卵を産まないわ！どうして同じカメなのにそんなに違いがあるの？
マミー	それは私たちのもともと生活していた場所に関係しているの。そこには、ワニとかヘビとか、怖い肉食獣がいて、それだけ一度にたくさん子どもをつくらないと、私たちの種は生き残っていくことが出来なかった。
ミミ子	その点ここは怖い敵もいないし、食べられる心配があまりないから嬉しいよネ！
マミー	そう、だけど環境が変わったからといって体の仕組みをすぐに変える事はできないわ。イシガメさんにはずいぶんなご迷惑をかけたようだけど、私たちだって望んでここへやってきたわけではない。けれど今はもうここで生きていくしかないの。
ハハガメ	そんな･･それじゃあ私たちはこれからどこで、どうやって生きて行けばいいの？
カメ子	おかあさん･･･。
ハハガメ	何でこんなことになってしまったの･･。
ナレーション	こうして、カメたちの間ではなんの解決法も見つけることは出来ず、さらに月日は流れて行きました。その後も池ではアカミミガメの家族が増えつづけ、かわりにほとんどのニホンイシガメたちが池から姿を消してしまいました。 その行方を知る者は誰もいません。

実はこのお話ただの昔話ではありません。今、現実に日本各地でおこっていることなのです。
カメたちの悲しみの原因は何だったのか、この劇をご覧なった皆さんならば、もうお分かりいただけたと思います。

それではこれをもちまして、「カメたちのちょっと昔話　大濠公園は安住の地？」を終わります。ありがとうございました！